暮らしと自治 くまもと
2020年9月号

第167号（通巻230号）
ＮＰＯ法人 くまもと地域自治体研究所
熊本市中央区神水1-30-7 コモン神水
TEL & FAX 096-383-3531
http://k-jitiken.blogspot.com/
ﾒｰﾙ：km-tjk@topaz.ocn.ne.jp

◆特集　豪雨災害　～被害の実態と復旧への課題

検証・7月4日球磨川大洪水

清流球磨川・川辺川を未来に手渡す流域郡市民の会　緒方 紀郎

7月4日、球磨川流域は空前の豪雨に見舞われ、流域各所で氾濫。多くの方々が亡くなられました。被災された皆様、お亡くなりになられた皆様に、深くお見舞いお悔やみ申し上げます。

球磨川洪水の翌日（7月5日）以降、八代市萩原堤防、人吉市内（九日町～温泉町）、錦町の木綿葉大橋付近、川辺川の下流部（球磨川合流部～相良村廻地区）、球磨村（渡地区～馬場地区）、人吉市中神町の破堤箇所、八代市坂本町などの被災状況を見てきたことを報告します。

（1）空前の雨量

地球温暖化がもたらす海からの多量の水蒸気が線状降水帯となり、球磨川流域に長時間流れ続けました。球磨川流域の全域で、7月4日午前9時までのわずか9時間に300～400ミリ前後の猛烈な降雨がありました。今回のように、球磨川全域で桁外れの雨が長時間、降り続けることはかつてなかったことです。

今回の災害は、地球温暖化による「人災」だとも言えます。地球温暖化が続く限り、このような豪雨災害は日本中どこででも起こりうることです。

（2）球磨川の氾濫

線状降水帯による空前の豪雨で球磨川は短時間で満杯となり、各支流（川辺川、小さで川、万江川、小川など）は、球磨川の水位が高いために本流にはけきれずに越水したようです。球磨川が狭くなる人吉盆地の下流に行くほど洪水水位は高くなり、特に球磨村渡地区では、近年設置された排水ポンプや「導流堤」も全く役に立たない、桁外れの浸水でした。

災害翌日の人吉市九日町（2020.7.5撮影）

人吉市中心部の九日町への浸水は、まず山田川（支流）から始まり、午前9時頃には誰も予想出来なかった球磨川本流からの大氾濫が始まり、ピークは9時50分頃でした。昭和40年7月3日の洪水水位を2mも上回る、かつてない浸水でした。

人吉の球磨川の水位は、観測史上最高の5.05m（昭和40年7月3日）を大きく上回る7.25mを記録。青井阿蘇神社（国宝）の楼門や拝殿も1.5mほど浸水しました。1200年の歴史を持つ同神社の記録に、

☆もくじ☆

◆特集　豪雨災害　～被害の実態と復旧への課題
検証・7月4日球磨川大洪水 ・・・・・・・・・・・・・・・・・ 緒方　紀郎 ・・・・・ 1～3
被災者の生活状況と復旧の課題
　－コロナ禍での対話・交流づくり ・・・・・・・・・ 高林　秀明 ・・・・・ 4
会員の被災状況 ・・・ 5～6
7.4豪雨、球磨川氾濫を体験して ・・・・・・・・・・・ 淵上　公典 ・・・・・ 7
新型コロナで記者発表・注目の書籍紹介・編集後記 ・・・・・・・・・・ 8

浸水被害の記録はありません。今回の洪水は、雨量も洪水水位も過去最大でした。

川辺川永江地区の雨宮神社周辺は昨年、国土強靭化で「洪水の流れをよくする」との名目で、水害防備林（河畔の樹林帯）が伐採されました。これまで洪水の水勢を弱め、農地への土砂の侵入を防いでいた水害防備林が無くなったため、農地に大量に土砂が流入していました。

水害防備林が伐採され土砂が流れ込んだ農地。
相良大橋から上流側を撮影（2020.7.11撮影）

八代市坂本町の坂本地区では、地区全体が５ｍほど嵩上げされていたのが、多くの家屋が１階天井まで浸水していました。合志野地区では、堤防を３ｍほど乗り越えた洪水が、地区最上流部の堤防のパラペットを倒し、家屋を押し流し、基礎部分だけが残った姿に言葉もありませんでした。いかに狭窄部の洪水時の川の流れが速かったのかがわかりました。

下のガードレールが改修前の道路の高さ5mほど嵩上げされていたのに、1階天井付近まで浸水していた（2020.7.25撮影）

八代市の萩原堤防の洪水痕跡は、堤防天端から約2.5m下、堤防のコンクリートと土の境目くらいでした。今回の大洪水でも八代では十分な余裕があることが明らかになりました。

（３）これまで私達は球磨川をどのように変えてきたのか

今回の洪水まで、私たちは「洪水が球磨川の堤防を越えることはあるまい」と思っていました。ところが今回は、その堤防を2mも3mも超える洪水が来たわけです。堤防を数10センチ上回るくらいならば、堤防は被害も抑え、逃げる時間も確保できたかもしれません。しかし3mも超えると、ダムの非常放水と同じで、あっという間に水位が上がる一因にもなったと考えられます。何より堤防があることで安心していたことで、避難が遅れた例も多かったようです。また、堤防ができたために水害後に水がいつまでもはけなくて、昭和40年洪水の時は水が引くとともに泥もかき出せたのが、それもできなかった地区も多かったようです。

人吉市七地地区や相良村の川辺川では、「国土強靭化」で洪水を流れやすくするという名目で、水害防備林（河畔の樹林帯）を切ってしまったことで、洪水の流速を強め土砂を流入させるなど、被害を拡大させています。

これまで流域の山林の渓流も、農業用水路も、球磨川の支流も本流も、少しでも早く洪水を下流に流すために直線化され、護岸はコンクリートで固められてきました。ところが人吉盆地の出口（球磨村渡地区）では川幅が狭くなり、流れがはけきれないために、人吉盆地下流ではかつてない速さで洪水の水位が上昇したと考えられます。

（４）緊急放流しようとした市房ダム

「球磨川が氾濫している最中にダム放流とは何事だ！」今回、甚大な被害を受けた人吉住民の怒りの声です。人吉市など下流域が浸水しているさなか、球磨川上流の市房ダムは7月4日午前９時半から緊急放流を開始すると熊本県が発表。各報道機関は下流の住民に対し、ダム緊急放流による水位の急激な上昇から命を守るよう、繰り返し警戒を呼び掛けていました。

結果的には市房ダム上流の豪雨が弱まったために、ダム緊急放流は回避できたようです。被災し

テレビニュースの画像より（2020年7月4日朝）

市房ダム緊急放流を知らせるNHK WEBニュース
（2020年7月4日朝）

た人たちから「ダム放流が無くてよかった」「もし放流されていたら、どんなに大変なことになっていたことか」などの話を多く耳にしました。

ダムは緊急時には、流域住民の生命財産を奪うものであることを、住民は過去の災害で体験しています。人吉ではこれまで、水害体験者が先頭に立って川辺川ダムに反対してきました。

今回の洪水では、川辺川流域の降雨は球磨川本川の降雨と比べ、そこまで大きくなかったようですが、もし川辺川ダムが存在し、線状降水帯による今回のような豪雨が川辺川ダムの集水域を襲えば、ダムは満水となり、緊急放流をしていたのは明らかです。

今、ネット上では「川辺川ダムがあれば人吉の水害は防ぐことが出来た」というような宣伝を多く目にしますが、今回の球磨川水害の原因や地元の実情を知っているのか、科学的な検証に基づいたものなのかと感じます。

（5）今後求められる災害対策

今回の球磨川の洪水は、雨量も洪水水位も過去最大で、国の想定(河川整備基本方針)を大きく上回っています。これまで国は、何十年かに一度起きると考えられる洪水を「想定」してダムや堤防をつくり続けてきました。しかし今回は、その「想定」をはるかに上回る豪雨でした。ダムと連続堤防で洪水を川に閉じ込めようとするこれまでの「治水」のあり方を根本的に変えるべきです。

私たち住民にとっても、これまでの経験が全く役に立たなかった今回の豪雨災害は、全くの「想定外」だったとも言えます。

今後は、どんな規模の洪水が来ても被害を最小限度に収める災害対策が必要です。国土交通省も7月6日、洪水や巨大地震に備える防災・減災総合対策を公表し、堤防やダムだけに頼らず、土地利用規制、避難体制の強化などを含む「流域治水」への転換を明記しています。「想定以上」の洪水で満水となり、緊急放流を行うダム治水は、必然的に今後の洪水対策から除外されるべきです。

球磨川ではこれまで、少しでも早く洪水を流すために、山林の渓流から本流まで直線化が行われてきました。今後は、流域全体で洪水をゆっくり流すことで、人吉盆地下流部への洪水の集中を防ぐ（洪水のピーク流量を下げる）ことが必要です。田んぼの貯水機能の活用※、水害防備林（河畔の樹林帯）の復活、そして浸水する可能性のある地区の嵩上げや移転など、総合的な地域づくりを進めていくことも必要だと思います。

※田んぼの排水口や畔（あぜ）などに少し手を加えるだけで、流域の保水力が大幅に高まります。

【資料】早く流す治水から　ゆっくり流す治水へ

九州大学工学研究院の島谷幸宏教授（元国土交通省技術者）が、「球磨川流域の持続的発展のための流域治水に関する提言～早く流す治水からゆっくり流す治水へ」をホームページに掲載されています。

https://yukihiroshimatani.wixsite.com/shimatani/blank-6?fbclid=IwAR3yFkjk_kUHlWaFFP4GdiiLURckiVUILMemAP6xG5d-J1hJCizjL34LZHg

今後、球磨川の洪水対策を考える上で重要な提言だと考え、以下抜粋したものを掲載します。

～～～

被災者の生活状況と復旧の課題
－コロナ禍での対話・交流づくり

当研究所副理事長　高林　秀明（熊本学園大学教授）

球磨川氾濫から2日後、被災地に地元出身の学生と入りました。以来、人吉市を中心に学生とともに、泥かきや野菜スープの配布、生活支援を継続しています。以下はこの1ヶ月の活動報告です。

（1）被災者の状況－在宅避難、避難所

パニック障害のある女性Ａさんは、自宅の2階で暮らす在宅避難者です。水、トイレ、電気は使えますが、冷蔵庫も洗濯機もエアコンもテレビも使えなくなりました。私たちは、床を剥がし、泥かきを始めました。作業をしながらお話を聞いていると、両親は他界し、頼れる親戚もなく、近所づきあいもありません。経済的にも大変厳しい様子です。冷蔵庫は自身で調達しましたが、他は熊本市や西原村の方から寄付をいただいたものを提供しました。障害年金がないため仕事を探していますが、精神疾患だけでなく腰痛や内臓疾患も抱えています。1階部分の修繕には300万円以上かかるでしょうか。罹災証明の判定結果（全壊か半壊か）が気になります。

Ｂさんは足が不自由な60代の単身男性です。賃貸の平屋の家財出しを手伝いながらお話を聞きました。早朝、水は口元（床上２メートル）まで来ましたが洗面台に上がり何とか呼吸を確保して助かりました。Ｂさんは熊本地震でも被災して西原村の避難所に避難し、現在は人吉市内の避難所にいます。今回は段ボールベットにも弁当にも満足だが、西原村の避難所と違って、避難者同士の交流も助け合いも乏しいのが不満とのことです。子どもが避難所で走っていると心ない対応をする方もいるそうです。皆で話し合えば気遣い合えるのにと残念がっていました。この方は公営住宅の空き部屋またはみなし仮設への入居を考えています。

そして、先日、60代後半の女性Ｃさんの家財運びや泥出しのお手伝いをしました。単身のＣさんは愛犬と5時間も庭木につかまり、水が引くのを待ちました。自宅は床上２メートルの浸水です。その愛犬が車中泊中に熱中症で息絶えてしまい、「もう失うものは何もない」と涙されました。Ｃさんは5月に職場を解雇され手持ち金もほとんどありません。その上、全壊だと思っていた罹災証明が半壊と判定されてがっかりされていました（二次判定を申請予定）。それでも一歩踏み出すために、八代市内にみなし仮設（借上型仮設）を申し込まれました。

学生による床下の泥かき（床上1.5メートル浸水）

（2）復旧に向けた対話・交流と制度利用

Ａさんは1500人以上の在宅避難者（熊本県発表）の典型と言えます。在宅の方々にも物資や情報を届ける必要があります。それをきっかけに心の通い合う対話と交流が生まれることが大切です。ニーズをつかみ、生活再建の道筋を一緒に考えることにもつながります。Ｂさんの避難所の不満は、生活にとって大切なものは生活環境や物資に加えて、コミュニケーションと協力、自治であることを示唆しています。Ｃさんに災害救助法などの制度利用のポイントをお伝えすると、すぐに役場に相談されました。制度利用についての助言や支援が必要な方は多いです。いずれも大切なのは人との関わり、対話・交流の積み重ねです。

しかし、新型コロナウイルスの影響で県外から被災地に入れないため、これまでの災害時のような対話・交流の厚みがありません。そこで、一つの工夫として、例えば、泥かきや片付けの際にも、被災者から生活や健康の様子や見通しを伺い（メモして）、必要に応じて関係の機関・団体につなぐことなどが必要です。他方で、県外のNPOや様々な専門家も、様々な形での支援を模索しています。被災者の生命と生活を守る（最悪の事態として災害関連死を生まない）ために、被災者と県内外の人たちとの多様な対話・交流をつくりながら、過酷な避難環境の改善と適切な制度利用へのつなぎが大切です。コロナ禍での「社会的距離」をお互いの知恵と工夫によって乗り越えていきましょう。

会員の被災状況
（聞き取り調査報告）

今回の豪雨災害では、人吉市・八代市・芦北町などにお住まいの自治研の会員の方々も被災されました。お見舞い申し上げます。
被災の状況がそれぞれあるなかで、被害に遭われた会員のうち４人の方に被害の状況を伺いました。　（事務局　杉本・渕上）

鳥飼 香代子さん（人吉市九日町）

家は川から70mくらいなのですが、３階で見ていて堤防を越えたかなと思ったら、６時半ぐらいに一瞬で家の中に入ってきて、１階が1.5mほど水がきました。子ども食堂をしていた机やイス、電気製品も全部だめになりました。２週間は断水でしたが、今は復旧して２階で普通に生活しています。１階は片付けが済み、床と壁紙を剥いだ状態です。臭いがすごいので、高圧洗浄を３回して消毒をするという段取りです。それから床と壁を貼ることになります。しかし、大工さんがいつ来てくれるかですね。
被災してすぐに、伝統建築の指定をうけている旅館や温泉に建築士会の人たちや県職員など大勢がボランティアに入って手伝いをしていました。しかし、生活している周辺の民家や商店はほったらかしで避難所からなかなか帰れず、優先順位が逆ではないかと思いましたね。ボランティアはコミュニティー単位で入ることが基本ですけどね。
近隣の人の多くは避難所や親戚の家などに避難しているようですが、戻らずに転居を考えている人もいますね。鍛冶屋さんや焼酎屋さんなど古くからある商店が続けられるか、支援はあっても再建するには大変だと思いますね。
道路のゴミや泥が片付けられたら、避難所にいる高齢者が散歩がてら立ち寄れる場所を提供したいと思っています。雑談しながらお茶を飲みゆったり過ごせる避難所とは別の空間です。１階がきれいになったら開きたいですね。
（７月25日聞き取り）

原口 英一さん（人吉市田町・町内会長）

前日からの雨は、ちょっと多いかなというぐらいに思っていたところ、４日の午前２時ごろから防災本部から注意喚起がされ始めました。４時半位に球磨川を見に行くと、橋の欄干までまだ２メートルの余裕がありました。自宅の側を流れる胸川も増水はしていましたが、気にするほどではありませんでした。
６時ごろ町内会の係の方と一緒に山などからの降雨を胸川に流す溝の水門を閉めましたが、その後から溝から水があふれ出し、球磨川からあふれた水も合わさって道路に水があふれてきました。その時点で危険が目前に迫っていると認識し、町内に「一緒に助け合って避難を」と呼びかけました。自宅で各方面に連絡をかけていましたが、とうとう胸川も溢れるとみるみる水位が上がり、息子から「うちも避難しよう」と言われた時には、位牌を出す暇もなく避難するだけで精一杯でした。近隣は床上浸水など軒並み家屋に大きな被害が出ましたが、幸いにも人的被害はありませんでした。

現在はボランティアにも入ってもらい自宅で生活しながら片づけをすすめていますが、被災から１週間位経った頃から気力が出てこなくなりました。医者にかかると熱中症と疲れが出たとのことで、１週間に１回は点滴を打ってもらっています。自宅の隣にある実家は、泥かきをやってもらいましたが、時間が経つにつれ壁が落ちたり曲がったりで、再建できるか分からない状況です。
１ヶ月半ほど経ち、災害ごみの内容も変わってきています。水没しても大切な物なので取ってお

いたものが処分せざるをえなくなったり、ボランティアにはお願いできないごみも出てきていて、そういうときは顔見知りの方がいい場合があります。町内会では有志を募り、地域の方のごみの搬出の手助けをしようと準備しています。

（８月17日聞き取り）

光永 了円さん（八代市坂本町）

家は球磨川沿いの西鎌瀬で、肥薩線の第１橋梁（流された赤い鉄橋）の近くです。過去に洪水があったので嵩上げ工事がされ、水門もあり国交省の職員が閉じることになっていましたので、夜間からの緊急避難速報を聞きながらも大丈夫だろうと思っていました。ところが翌朝５時頃には濁った水が道路に溢れ、水門は開いたままで国交省に電話をするも繋がらず、水門を閉めるにも鍵がありませんでした。家族を２階に避難させようと思いましたが水の勢いが激しく、家が流されてしまうかもしれないと高台に高齢の母や息子家族8人で避難しました。その時は茶色の濁流が堤防を越え迫っており、アクセル全開で脱出しました。

国道沿いの高台には、集落の20人が避難していました。近所の高齢者を助けに行ったすぐ後には、山が崩れ道が塞がれ、11時頃、轟音とともに目の前の鉄橋も３分の２は流れていきました。いつも通っている中津道橋も流され、完全に孤立してしまいました。消防署に電話するもいつ助けに行けるかわからないという返事でした。経営する保育園は水没しましたが、保育園バスは避難していたのでそこで寝ることにしました。翌朝、ヘリコプターで全員が救助されました。高台にあった管轄下の高齢者施設も全員救助され無事でした。

現在は被災した保育園の転居先を探したり、被災した住居の後片付け、経営している高齢者施設の再開とパニックになりながら走り回っています。

（８月10日聞き取り）

坂本　登さん（芦北町議会議員）

夜からものすごい雨で、午前１時半位に町から緊急避難情報が出ていました。１時間毎に警報が鳴っていましたが、強い雨と思っていました。今思えば危機意識が薄かったと思います。毎年各地で洪水が起きていたので、議会では「町民に避難を徹底するように」とか「訓練の徹底」などを議題に挙げていましたが、実際には町民の95％ぐらいは避難しませんでした。

４時頃、外を見たら、道の水位は5センチ位でしたが、裏が河口で５時半には満潮になるので避難をすることにしました。車に乗り道に出たらドアの下から浸水し、ハンドルが利かない状態でした。家は平屋なので、隣の倉庫の2階に避難させてもらいました。その間、水はあっという間に父の首まできていたので、倉庫までの15mを歩くのも高齢の父にとっては大変でした。あと10分遅かったら逃げられなかったでしょう。「とにかく避難」すること、これに尽きます。

水は165cmの高さまできたので、畳、ふすま、タンスや電化製品すべてだめになりましたが、父が「家がいい」というので、最初は板場にゴザを敷いて布団を敷き寝ました。電気と水はその日の夜には回復しました。

商店街は高齢者が多く、存続は難しい状況です。借入もできますが、コロナで打撃を受けた上に借金はできないと言う方がほとんどです。町は「昭和のまちづくり」として、木造家屋の風情のある町になっていたのですが、大きな被害を受け今後が心配です。今は、障がい者の方やひとり親世帯の家庭などには早急な行政の支援が必要だと思います。（８月１日聞き取り）

7.4豪雨、球磨川氾濫を体験して

理事　淵上　公典（人吉球磨担当）

次々と発せられる緊急速報

7月3日22:59、携帯電話の警告音がけたたましく鳴った。人吉球磨地域に張り付いた線状降水帯による危険を知らせる緊急速報「エリアメール」第一報だった。内容は、人吉市が発令した避難勧告(レベル4)で、矢岳町、東間校区、大畑校区への土砂災害の危険、避難を呼びかけるもの。その後、緊急速報は、近隣市町村から、次々と発せられる。△避難準備・高齢者等避難開始(23:55/相良村)、△避難勧告(23:57/錦町、0:14/山江村・山田、0:36/相良村、1:55/山江村・万江、3:48/人吉市・宝来町など、4:00/人吉市)、△氾濫の恐れ(3:39/錦町・一武、3:45/球磨村・渡、4:22/人吉市)、△避難指示(4:54/相良村、4:57/山江村、5:05/錦町、5:22/人吉市)が発令され、そのたびに携帯電話の警告音が鳴った。

はん濫危険水位を超える中、危機一髪の避難劇

国土交通省の”川の防災情報”を開き、球磨川流域の水位データを調べたところ、5時時点で、我が家のすぐ近くの一武観測所でも、柳瀬観測所でも、人吉観測所でも氾濫危険水位を超え、上昇し続けていた。これでは、人吉は浸水する可能性が高いと判断し、人吉労音事務局(下青井町)が心配になり、6時05分に自宅を出発し、219号線から人吉に入ることに。6時18分頃、人吉橋を通過中、下流右岸の人吉旅館附近を見ると、球磨川水位は堤防の天端近くまで迫っていた。事務所前に車を横付けし、事務局長と電話しながら急いでパソコンなどを車に積み込んだ。事務所を出たのは、6時30分ごろ。後で、分かったことだが、労音事務所近くの松屋温泉ビジネスHの防犯カメラには、6時50分頃から道路が冠水し始め、7時07分には車が浮いて流れる様子が記録されている。まさに、危機一髪の避難劇であった。

国道445号線下青井町(労音前)　2020.7.5撮影

過去にない未曾有の大災害に

今回の7.4豪雨災害は、過去にない未曾有の大災害となった。人的被害も甚大で、球磨村渡地区では特別養護老人ホームが浸水し14名が亡くなった。球磨川の決壊2カ所、溢水11カ所により、下表のような浸水被害が発生した。JR九州・肥薩線の橋梁流出2カ所、くま川鉄道・湯前線の橋梁流出1カ所など、重要な交通手段がズタズタにされ、その復旧の見通しは立っていない。

市町村	人的被害			住宅被害					
	死者	行方不明	合計	全壊	半壊	一部損壊	床上浸水	床下浸水	合計
	名	名	名	棟	棟	棟	棟	棟	棟
人吉市	20		20				3,775	906	4,681
錦町						1	64	62	127
多良木町				1		2	10	62	75
湯前町						1	1	38	40
水上村								7	7
相良村				18	88	61			167
五木村					1		1	5	7
山江村				11	14	18			43
球磨村	25		25				470	20	490
あさぎり町						4	51	90	145
八代市	4	1	5	142	165	70			377
水俣市						110	32	87	229
芦北町	11	1	12	14	7		977	344	1,342
津奈木町	3		3	5	25	70			100
合計	63	2	65	191	300	337	5,381	1,621	7,830

人的・物的被害の状況
（内閣府ホームページ　8月7日現在）

新型コロナ調査で記者発表
自治体独自の支援事業を分析

８月11日、当研究所が実施した県内全自治体に対する「新型コロナウイルスの影響に対する自治体独自の支援事業に関する調査」結果を県庁記者クラブで公表しました。

調査結果は早い時期にまとまっていましたが、球磨川大洪水等の甚大な被害が発生しましたので、暫く時間をおいていました。

新型コロナウイルス感染対応では、国の対応が後手に回ったということもあり、市町村の中には、いち早く対応を始めたところもありました。

住民の暮らしに関することは、本来地方自治体が司るものです。そのような観点から、地方自治体がどのような対応をしたかを調査することで、自治体の姿勢や問題点を明らかにし、先進的な取り組みの共有を図る目的で実施しました。

県内45市町村全てにアンケートを郵送、約90％にあたる40市町村から回答がありました。回答の殆どが別添資料を添付して返送されており、市町村が様々な対応を検討し、施策の追加を重ねている姿が浮き彫りになりました。

一方で、自由に使える「財政調整基金」の豊富な市町村とそうでない市町村で、対応に違いがみられました。しかし、財政難を理由に住民の苦しい暮らしを放置する訳にはいきません。県や国に

増額や援助を要請するなどの動きが無かったところに、今一歩踏み込めない自治体の姿があるようです。

記者会見には、豪雨災害やコロナ禍にも拘らず、記者クラブ所属14社のうち７社が参加、活発な質疑で関心の高さが伺えました。

事務局　福川　雅三

《注目の書籍紹介》

豪雨災害と自治体
防災・減災を考える

大阪自治体問題研究所
・自治体問題研究所編（著）
自治体研究社刊　1,600円＋税

毎年のように豪雨災害が猛威を振るっている。その原因・メカニズムを気象学、被害の拡大を地質学から追究し、2018年の豪雨が各地にどのような災害をもたらしたか、現地からの詳細な報告を収める。

そして、このような災害に対して自治体はどう対応すればよいのか、防災と減災の視点から問う。

第62回自治体学校 Zoom分科会・講座等
テキスト・記念講演ＤＶＤ注文受付中

自治体学校は終了しましたが、テキスト・記念講演のＤＶＤはお申し込みを受け付けています。ご入用の方はご連絡ください。

◆記念講演ＤＶＤ収録の内容
【記念講演】
「地球環境の危機と地方自治――新型コロナ問題・SDGsへの対応など」
宮本憲一（大阪市立大学・滋賀大学名誉教授）
【緊急報告】
「第32次地制調答申が狙う自治体再編――2040構想の具体化を許さない取り組み」
岡田知弘（自治体問題研究所理事長・京都橘大学教授）
◆費　用　3,000円
◆お申し込み　自治体問題研究所
Email info@jichiken.jp

編　集　後　記

今号は豪雨災害特集号として被害の現状を中心に掲載しました。今後は救援復旧から復興へとステージが移行していきます。被災者を一人も取り残さない「人間的復興」へ、熊本地震での教訓と課題を生かさねば。（Ｆ）